ボランティアに求められるものは？

永野知己（生環18期・6次に参加）

平成23年3月11日、東北大震災が起きた日。「気が付くと、女川町医療センター1階、天井との数十センチの隙間に浮いていた。一緒に避難したしたお年寄りとははぐれた。津波が小高い丘に押し寄せ、高さ16メートルに達した。職場の駐車場に止めておいた私の車は建物の上に引っかかっていた。生死の境目は紙一重で運良く助かった」と当時、女川社協の職員だった武石久美子さんが証言してくれた。武石さんは、医療センター西隣の社協で勤務していた。「津波が来る」との情報に、センターの方が安全と判断、お年寄りの手を引いたり、車椅子に乗せたりして、センター1階に避難したところだった。津波の姿を見たわけではなく、あっという間の出来事。7月3日、センターで津波の記録の説明をしながら話してくださった。武石さんには、7月4、5、6日の3日間、派遣チームとともに行動、献身的に助けていただいた。

7月4日、女川復興住宅での懇談会。ある女性は「あれほどの津波は予想もしなかった。あちらにもこちらにも、手をつなぎながら押し流される人がいた。家はポコポコと浮き、クルクル回って流された。上へ、上へと登って、なんとか逃げのびた」と話していた。

女川町では、復興住宅が昨年4月に完成、400人余りが入居した。仮設住宅から移った人が大半。自治会がなく、町役場の世話で発起人17人を選出したが、自治会長になり手がいない。紆余曲折の末、やっとのことで自治会は発足。ことし4月には女性部会も結成され、老人会もできた。月2回の回覧板回し、役場の新聞配布、自治会費集めなどで、住民同士のつながりが少しづつ深まっている。女川社協の話では、ボランティアグループが40位組織された。「地域の弱い人は地域の人で助ける」こと、自助の覚悟が大切ではないかという。

数百年に一度の大災害。神戸の例を見ても、本当の意味で復興するには何十年もかかるだろう。女川では住民がよその町に流出、人口が減り、高齢化も進んでいる。今、現在、女川の住民が本当にして欲しいのは何か。自分たちに出来ることは何か。息の長い、地道なボランティアが求められていることは間違いないと考えた交流だった。